村上忠順翁顕彰会報

御城番屋敷 （撮影：酒井）

村上忠順翁顕彰会報　第２４号

編集　　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　　平成２５年３月３０日

★ 目 次 ★

	P
・こころを整理する	2
・「忠順心の原風景、松阪」に参加して思うこと	3
・女性部研修会に参加して	3
・村上忠順をめぐる人々 紀州出版書肆　阪本屋喜一郎	4-5
・平成２４年度活動報告	6
・忠順大賞入賞作品	7
・忠順大賞・総評	8

こころを整理する

村上忠順翁顕彰会　会長　近藤　光良

最近電車に乗ってあたりを見回すと、半分近い人たちが静かに携帯電話を相手にしています。これは若い人に限らず、かなり年配の人も同じです。ひと昔前のように新聞、雑誌を読む人はかなり減少してきています。扱っている内容は、ゲーム、テレビ、音楽、メール、情報検索など様々のようです。かつてのように着信音や送信音に悩まされることはなくなってきましたが、何となく異様な光景です。携帯の普及率が高くなってきた証拠だと感じます。

昨年豊田市が募集した児童・生徒の作文や交通安全の標語をみていると、前林地区の児童・生徒の何人かが優秀な成績を納めています。これは大変うれしいことです。なぜなのか考えてみると思い当たる節があります。村上忠順翁顕彰会では、毎年「忠順大賞」を実施してきました。初期には感謝の気持ちを表現してもらうことを一つのテーマにしていましたが、応募者の皆さんにもっと自由に題材を選択していただくために、題材を自由にしました。毎年多くの児童生徒、一般の皆さんから応募をいただき、選考にあたり嬉しい悲鳴を上げています。内容をみていると、年を重ねるごとに表現が洗練されてきているように感じます。

日常的な感情を、三十一文字に凝縮する作業は慣れないと難しいと思います。しかし、最近の応募作品をみていると、素直な気持ちをうまくまとめている作品も多くみられるようになりました。前林中学校には、廊下などに生徒たちの作品があちこちに展示してあります。そのひとつひとつが、なかなか味のある作品となっています。こうした日頃の活動が、豊田市が募集する作文や標語に前林地区の生徒たちが複数入選する契機になっているのではないかと感じます。それと同時に、こうした子供たちの作品づくりに「忠順大賞」の活動が少しでも影響しているとすれば、私たちが取り組んでいることが役に立っているのかな、と陰ながら喜びたいと思います。

最近のニュースでは、学校におけるいじめの問題、ちょっとしたことから殺人をする、暴力による指導など暗いニュースが多く掲載されています。もう少しみんな自制心を持つことが大切だ、と感じます。これは、携帯電話に代表される電子機器の発達と関係しているような気もします。こうした機器は感情をすぐに文字や言葉にして相手に伝えることができます。そのため感情を、一度自分の中で整理するということが不足してきます。感情を自分の中で整理することにより、伝えたいことをより明確にすることができ、自分自身の感情をコントロールすることができます。

前林地区の子供たちは短歌をつくることを普段から実施しているために、自分の主張を相手にしっかり理解されるような表現能力を身に着けているのではないか、そんなことを感じます。

新しい日本を築いてきた明治時代の若者たちは、二十歳前後でかなりしっかりした考えを持ち、社会的活動をしてきました。時代とともにこうした行動は高年齢化してきています。そこには、自分の意見を整理し、自らの手で文章をまとめることが日常的行為であったことにも関係しているように思えてなりません。

悲しい事件を減らし、心にゆとりを持った社会を取り戻すには、大げさかもしれませんが、湧き上がった感情を少し整理する、そして手を動かし文字に直し、より明確に相手に伝える、そんなひと時を確保することが大切なような気がします。そこでひとつまとまれば、是非今年の「忠順大賞」に挑んでいただきたいものです。

「忠順心の原風景、松阪」に参加して思うこと

石川範行

去る十月二日、二回目の参加である忠順歴史探訪に四十二名の参加者と共に、三重松阪に出かけた。私にとって村上忠順は小学校の頃、「郷土に輝く人々」という本で学んだ当地のすごい学者という印象の人物でした。その人の生き方に興味があったのも参加の理由です。松阪というと松阪牛くらいしか印象に無く、その地をゆっくり見学する機会は、今までありません。着いてみて驚いたことは、松坂城を中心としての街造りの見事さです。城前の武家屋敷は今もかつての面影を残し、マキの生け垣と共に現在も人が生活していました。何かほっとする雰囲気がありました。城跡の中に忠順に影響を与えた本居宣長記念館。そこには宣長に関する貴重な資料。古事記の研究、編纂をした有名な国学者。その古事記伝を更に注釈し新本を発刊した忠順、生きた時代は違うのにどのような接点があったのか、現在と違い交通、通信手段のない時に何回も伊勢路を訪ね、本を執筆している忠順の行動力とは何なのか、私には伺い知れないものがあります。松阪商人として江戸に多数進出し木綿商いを中心として日本をリードしていたと聞いた時も驚きでした。宣長の実家である小津家、三井家等々、なぜこんなに。徳川御三家紀州家とのつながりがあったとしても、今の日本にこんな指導者がいたらと思わずにはいられません。

商人の街を伊勢路の中心道路に配置、その商売によって実を取る。当時日本一とされた木綿とマッチさせ財を成し、幾多の変遷をくぐり抜け今に至っている。思えば思うほど感心することばかりです。その商人の館も見学、その広大さ、蔵の造り、住居と店の配置等、当時の伊勢参りでの人々を取り込む工夫が多く見られました。宣長が十二才から晩年まで住んだ「鈴屋」は現在は城内に移築され、そんなに広くないけれど当時の財力のある人の暮らし振りを伺えました。一般の人々の生活はどんなだったのかと思いを巡らせました。

最後にトヨタ産業技術記念館を見学、短時間でしたが、織機の変遷を実演と共に見られました。何にしても今まで行ったことの無い場所、経験をする機会を得て、自分自身の生き方を考える場にもなりました。また参加出来ればと思います。事務局の資料作りからの御苦労に感謝します。

松坂城跡にて

女性部研修会に参加して

田中きよ

梅雨時の七月七日、午前八時半、高岡コミュニティーセンターに集合した四十余名の私達は東名高速を一路静岡県に向かいました。「お万の方ゆかりの中村家を訪れる旅」期待に胸を膨らませた旅です。

はじめは静岡県湖西市の豊田佐吉記念館へ到着。門を入ると「佐吉胸像」に迎えられ、集会室で「佐吉翁の生活」を描いた映画を鑑賞。自動織機の発明にとどまらず、自動車をはじめ日本の産業の発展への映像に感服し、晴れた日には富士山も見られるという展望台へ登った時、佐吉翁の情熱の偉大さと志に、感動せずにはいられませんでした。緑滴る広大な檜林とみかん畑を歩き、時間を惜しみながらバスに戻りました。昼食は「康川」でうなぎの御馳走。元気溌剌です。

次に訪れたのは浜松市にある重要文化財「中村家」です。大きな槇の木と土塀に囲まれた築三百二十四年茅葺屋根の母屋です。長屋門から母屋に入ると土間は広く天井は高くひんやりとほっとする涼しさを感じました。この中村家で徳川家康の側室お万の方が、家康の第二子である於義丸（後の結城秀康）を出産し、その時の胞衣塚が現存し、本多作衛門と知立神社のこと、於義丸の誕生祝いに舞われた万歳が後に西山万歳と

して伝承されたと説明を聞き、江戸時代の歴史の奥深さを学びました。NHKの大河ドラマを思い浮かべながら、バスは進み、静岡県を代表する「うなぎパイファクトリー」を見学後、オープンしたばかりの新東名浜松サービスエリアを散策、楽器の町浜松の美しいピアノの音色を聞きながら至福の時を過ごし、晴れ上がった夏景色を車窓から眺め一路帰途に、高岡コミセンへ五時到着。

楽しく感慨深かった旅に顕彰会事務局とその関係者の皆様の温かい心遣いに心から感謝申し上げます。七夕の夜、満天の星を見上げ、尚更美しい思い出となりました。

中村家にて

村上忠順をめぐる人々

紀州出版書肆

阪本屋喜一郎

東京都立小岩高等学校教諭
学術博士　中澤伸弘

昨年五月に刊行された『愛知県史』資料編二〇（近世六　学芸）（以下『県史』と略）は県下の名家・旧家所蔵の学芸関係の書翰を翻刻したもので、厖大な量の書翰資料が収められてゐる。このやうに書翰だけで一冊となつてゐる資料集を私は他に知らない。この中には村上家が所蔵する主に忠順翁に関する来翰も多く、百六十点余も掲載されてゐる。書翰は言ふまでもなく私信であるから、公開を前提には書かれてゐない。それゆゑ赤裸々な事実を今に伝へる貴重な史料群であり、これによりこの方面の研究が更に深化することが期待される。

今回はその中から紀州若山（和歌山）の阪本（坂本とも書く）屋喜一郎と忠順翁との関係を取り上げてみる。

阪本屋喜一郎は若山の出版書店であり、屋号を世壽堂と言つた。弟の阪本屋大二郎も同様に野田眉壽堂を称し、若山の出版業界の大手でもあつた。喜一郎が書店を始めたのは文化三年であつて、文化六年に若山に移住した国学者本居大平との関係から、多くの国学和歌の方面の書籍を手がけた。中でも文政十一年から始まつた、加納諸平の『類題和歌鰒玉集』の版元の一つとして和歌山の帯屋伊兵衛とともに世に名を馳せ、その後もこれに類する類題の和歌集の出版に意欲的に関与した。『県史』には村上家にある十八通の阪本屋の書翰の中から四通が翻刻されてゐる。それは安政五年九月（ア）、翌（六年か）二月（イ）、万延元年十二月（ウ）とその返信と思はれる文久元年三月（エ）の忠順翁宛の喜一郎の書翰である。忠順翁にはこの時代にこの手の類題の和歌集として『類題和歌玉藻集』初二編、『詠史河藻集』があり、また紀州若山の西田惟恒の年々歌集の後を追つた『元治元年千首』などがあり、これらの書物がみな紀州阪本屋が関与してゐることがこの書翰からわかるのである。

どの書翰も興味深いのは、忠順から差し出された若山の国学者宛の書翰の取り次ぎをしてゐることである。宛先は本居豊穎、西田惟恒、田辺の熊代繁里などで、返事も適宜とりまとめて忠順翁のもとへ送つてゐたのである。

さて（ア）の書翰を『県史』は安政五年としてゐるが、これは誤ちで六年である。書翰に西田惟恒から聞いたとして辞格考、安政四百首、春草集、出雲風土記かなの四点を送つてゐる記述があり、これを忠順翁の図書受け入れ帳である『寶貨記』に照らし合はせると、安政六年十月の項にこの新刊四点の書物名と購入価格が書かれ、書翰にあるのと同じ冊数と値段が付されてゐて「坂キ」とその購入先が書かれてゐることによる。『寶貨記』にはこのやうに購入先の書店名が書かれてゐるが、「坂キ」は阪本屋喜一郎のことでこの頃から見えてゐる。この西田惟恒は安政以降年々の歌集を阪本屋方から出してゐる諸平門の歌人であつた。また辞格考、春草集はともに豊後の物集高世の編著であり、『類題春草集』は初編であり、惟恒が校正に当たつてゐる。その関係でこのやうに西田惟恒を仲介として、また著作を通じて、物集高世と繋がつて行つたやうである。『寶貨記』によれば翁は前年にこの『類題春草集』を入手してゐるし、

今回の二部には「清風　利亮」と中野清風酒井利亮に贈るためのものであつたことも判明する。その後の『類題春草集』の二編には歌稿を送つたやうで、忠順翁はじめその周辺の人物の歌が多く採られることになるのであつた。なほここに見える「出雲風土記かな」をこの『県史』の解説四四五頁で「荒木田久老」の著とするがこれは出雲の富永芳久の著でこれも誤ちであることを書き添へておきたい。

また忠順の『詠史河藻集』の編輯には阪本屋の方から依頼があつたやうで、引き受けてくださつたことに書店側が感謝し、鴨川詠史集のやうにしてくれればすぐにでも出版すると約束してゐることがわかる。歴史上の人物の毀誉を歌に詠んだ『詠史和歌集』は嘉永六年に紀州の長澤伴雄が編んで阪本屋から世に出て、好評を博し、その二編が編まれたものの（後述する）伴雄の捕縛入牢によつて頓挫し、その代はりになるものを喜一郎が忠順翁に依頼したやうである。喜一郎の熱の入れようはただならぬもので、近く刊行される熊代繁里の『類題清渚集』の巻末にちらしを載せ、歌を募る、また出雲、石州、豊後へも歌を依頼するとある。（実際にその広告の載る『類題清渚集』があり、また阪本屋刊の架蔵の『国学人物志』巻末にはそれを用ゐた広告が載る。）出雲には当時千家尊孫国造を中心とする大きな歌壇があり、豊後は物集高世を言ふのであらう。また『類題清渚集』の序文を尊孫に依頼したこともこの書翰からわかるのである。

（イ）書翰も多くの事を語つてゐる。

忠順翁の『類題和歌玉藻集』初編はこの時点で既に編纂され、上巻は喜一郎のもとにあつたやうである。この書翰は下巻が届いたことを述べ、下巻の附録と姓名録を独立させて、上中下の三巻仕立てにしたいとの喜一郎の希望を述べてゐる。「三冊にした方が良く売れると考へる」などと販売の傾向を述べてゐるところが面白い。上巻は四季の冬までであり。下巻は恋、雑、また詞書きのある歌以下姓名録を用意したやうであるが、実際に刊行されたものはこの書翰通りに恋、雑を中巻とし詞書きの歌（七巻）以下が下巻となつてゐる。（二編も同じ。但し先の『類題清渚集』他の巻末の玉藻集の広告には二冊とある）。校正についての細かな記載があり、すぐにでも刊行になりさうな書きぶりであるが、実際に『類題和歌玉藻集』初編の刊行はこの五年後の文久三年のことであつた。またこれに長澤伴雄の歌があるが「当地で差支」があつて削除したい旨の打診をしてゐる。先にもふれたが伴雄は安政二年に失脚し、六年初冬に自刃して果てたが、当時は入牢の罪人の扱ひであつたからこの削除を希望したのであらう。これも刊本には削除されてゐる。伴雄のどのやうな歌がどの程度あつたのかは知るよしもないが、『類題和歌鴨川集』の編者であつて、名を馳せた伴雄の歌は当然多く採られてゐたのであらうし、それを除く事は忠順翁には無念の思ひもあつたであらう。拙著『出雲歌壇と国学』においても触れたが、出雲の森為泰に伴雄の捕縛を告げたのも阪本屋喜一郎であつた。

この書翰には「名所之事」として、のちに『名所栞』となる忠順翁の著作についての喜一郎の意欲的な返事が記されてゐる。（『県史』の解説八三五頁ではこの「名所之事」を『参河国名所歌合』のことかとするもさうではなく、また編者仲田を伊田に誤るのでここに書きおく。）喜一郎はこの出版に大いに期待を寄せたやうであり、文末に名所の考証に役立てほしく『草分衣』（歌枕を記した折り本、著者未詳）を貸すと書いてゐる熱の入れ方である。ただ元禄五年に出てなほ著名な有賀長伯の『歌枕秋の寝覚』の増補版（元禄版のあとに増補されたものが明和八年版、その後も若干の補訂や改版を施したものが幕末まで流行）のやうなものではなく新たなものとして出したく、書名も「古今名所叢」「古今名所名寄大全」「古今名所道分栞」などがいいと提案してゐる。『名所栞』の名はこの「古今名所道分栞」から思ひついたのではなからうか。（『類題和歌玉藻集』初編の巻末にある「蓬廬村上先生著述目録」には『名所栞』の他に『名所叢』の二著名が載り、それぞれ別の書物とされてゐる。）

阪本屋は出版も行つてゐたが、書物も取り扱つてゐた。また興味深いのは商品ではなく自分の蔵書を貸したり、また別に借りたりしてゐることである。殊に（ウ）書翰には忠順翁所蔵の『神遺方』十二冊を借りたことが書かれてある。当時若山の医学館で和方医書の校正を行つてゐて、この『神遺方』の校正に忠順の蔵書が役立つたと言ふのである。忠順蔵書が珍しいものであつたやうで「三州村上本」と言ふ印を作らせて、校

合の場所に押したいとの希望があると告げてゐるのである。この『神遺方』は現在村上文庫にある。また(エ)の書翰は『類題和歌玉藻集』初編の序文を千家尊澄に依頼したことが述べられてゐる。これによつて忠順翁と尊澄公を結びつけたのは阪本屋であつたことがわかる。尊澄公の序文に「木ノ国人よりこひおこせたる」によつて書いたとあり、先掲拙著にも不明としておいたが、この「木ノ国人」は喜一郎であつたことが判明した。

細かに見ればまだ様々な情報が満載されてゐるが、これだけ見ただけでも阪本屋喜一郎と忠順翁のやりとりが伺へるのである。忠順翁の活動に注目した阪本屋とまた彼を仲介にして全国の国学者歌壇と繋がる翁の姿は、翁のみならず当時の同様な人たちにみな共通した文化的な営みであつたと言へるのである。

平成二十四年度

活動報告

事務局　酒井順子

○四月二十二日
＊定例総会

総会の様子

＊生誕二百年記念行事
・西山万歳
・吟詠詩舞

西山万歳保存会・堤小学校郷土芸能部

郷土偉人詠村上忠順
醫術詩才兩峻賢
村民療護在雙肩
積年著述益多大
萬巻藏書千古傳
木戸粋叙作

木戸優粋師

・記念講演
「簗瀬一雄氏寄贈の忠順関係資料について」
豊田市教育委員会文化財課
係長　伊藤智子女史
＊「忠順ありがとう大賞」表彰式

○七月七日
＊女性部研修会
「すべては、ここから始まった」
参加者四十一名
・豊田佐吉記念館
・中村家
・うなぎパイ工房
・新東名浜松サービスエリア

中村家

○九月～十二月　第一土曜日
＊四方樹大学
参加者延べ五十八名
講師　新行紀一氏
(愛知教育大学名誉教授)
テキスト
「村上忠順集　座右記」

○十月二日
＊歴史探訪
「忠順心の原風景　松阪」
参加者四十二名
・本居宣長記念館
・鈴屋
・松坂城
・御城番屋敷
・松阪商人の館
・トヨタ産業技術記念館

講義風景

○十一月二十三日
＊忠順翁命日墓参

松阪商人の館

忠順大賞入賞作品

応募期間　十一月二十三日から
　　一月三十一日
応募総数　一八一〇首
入賞者　十八名
選者　荒川心星先生

入賞された十八名の方とその作品を紹介します。

○　小学生の部

豊田市長賞
堤小六年　藤田紗歩

冬の朝はっぱを見るとしもばしら
「かぜひかないで」と父おくり出す

豊田市教育委員会賞
堤小六年　杉浦なつ子

寒つばきわが家の庭でりんと咲く
家族を守る母と重なる

会長賞　金賞
堤小六年　長谷川桃香

北風に負けじと立たずむ寒桜
われを育てた母の立ち姿

会長賞　銀賞
堤小二年　中嶋ゆうと

晴れた日にきりぼし大こん
ねころんで
たいようの下であったかそう

会長賞　銅賞
堤小二年　野上あい

あおぞらにあたっているよ
だいこんが
たいようあびてげんきにそだつ

中日新聞社賞
堤小二年　山中あいな

あお空にてらされてるよ大こんが
みんなでほしたきもののように

優秀賞
駒場小三年　新屋元夢

いもうととけんかしたよる
ねがおみて
あすはなかよくしたいとおもう

堤小四年　都築圭人

木や風がきせつによって大変身
どきどきわくわくぼくの通学路

駒場小三年　野田ななえ

おかあさんいつもプンプン
してるけど
ほんとはとてもやさしいんだよ

堤小四年　峯岸万響

みんなでね女川にはいって
おべんきょう
いっぱいみつけた女川のふしぎ

○　中学・一般の部

豊田市長賞
藤岡飯野町　伊井松美

土つくり種からそだて野菜米
健康ならと今日も野良着に

豊田市教育委員会賞
前林町　甲村サカエ

半世紀飾り続けし三代の
雛は家族の絆となりぬ

会長賞　金賞
前林中三年　両金紋加

友達と過ごした時間忘れない
キラキラ光るアルバムにつめて

会長賞　銀賞
前林中三年　塩屋亜理沙

ときがすぎちちのせなかを
みつづける
じりつするまでつたえるすがた

会長賞　銅賞
前林中三年　正木泰斗

なぜこうもひとはかわって
しまうのか
ふとおもいけりかれくさなびく

中日新聞社賞
前林中三年　田中雄大

おやのあいぼくのためだと
わかっても
すなおになれずただくやしくて

優秀賞
前林中二年　杉山和樹

じいちゃんはむかしの話してくれる
ぼくもこのまちだいじにするよ

前林中二年　石川静音

しんゆうとほんねかわして
なかなおり
こころはれるがほほにはなみだ

忠順大賞・総評

選者　荒川心星

村上忠順翁を私が知ったのは、小学校一年生のときです。祖父から教わりました。村上家は当時の高岡村堤新馬場（現在の豊田市）にありました。毎年の春まつりのとき、村上家の前に立つのが楽しみの一つでした。それは祖父から「忠順さんは、お医者であるが、郷土を愛した偉人であり、努力家であり、世の中のためにいろいろなことをして、みんなから愛されていた人である。」と教わったからです。私も忠順さんのような人になりたいと思いましたが、それははかない夢になりました。しかし、今も、なつかしさのあまり、胸の奥深く消すことのできない灯りとなって燃え続けています。

或る日、事務局の方から「村上忠順翁顕彰会」の話をお聞きしました。その中に、堤小学校四年生による創作歌劇「郷土を愛す村上忠順」の発表会や「忠順大賞」があるのを知り、心を打たれました。

さて、本年も「忠順大賞」に大勢のみなさんが応募されました。小学生と中学生・一般の方を合わせて一八一〇首でした。応募された全員のみなさんに絶大な拍手を送りたいと思います。

昨年の応募作品のよい点は「ありがとう」という主題を据えて詠んだことです。今年のよい点は、それに加えて、身近な風景を取り入れて詠んだことです。

現在、うた（三十一文字の短歌）を詠んでいる人の多くは、六十歳以上の方です。それが、小中学生のみなさんが、三十一文字でうたを詠むのですからびっくりです。

ところでうた（短歌）を詠む基本は、自然を詠むことであるといわれています。自分のうた、自分でなくては詠めないうたを作るのには、自分の心を自然に託して詠むことが大切です。例えば、山や川そのものに相対してじっくりと写生するとか、自分の意思や感情を山や川と一体化して詠むとか、自分の体験を折り込んで詠むとか、さまざまな方法があると思います。

しかし、応募されるみなさんにとって何よりも大切なことは、わたくしたちの祖先から長く伝えられた郷土をいつくしみ愛しむ心をもって詠むことです。

今回の応募作品は、このような観点から審査しましたが、作品にほとんど差はありませんでした。したがって、私の好みで選びましたのでお許し下さい。

小学生の作品は、りっぱなうたでした。行為や風景をとおして心を述べたうたでした。入賞した六年生の「しもばしら」や「寒つばき」、「寒桜」をとおして、父や母を詠んだ作品は、りっぱなうたになっていると思いました。三首は全く差はありません。日ごろからよく考え、よく感じ、よく見ているのでしょう。中学生になっても忘れないで、「忠順大賞」に応募して下さい。

「切干し大根」を詠んだ小二のみなさんの作品も見事でした。切干し大根には、遠い過去から現在まで、郷土で生きてきた人々の生活の歴史があります。その長く深い歴史を負ってきた切干し大根を詠んだ子たちには、格別に、ありがとうと言いたい。そして、指導された先生方には敬意を表したい。

中学生の作品は中学生らしい作品でしたが、今少しと思いました。勉強や部活で忙しいと思いますが、時には、空を仰いだり風景を見たりして下さい。一般の方は力作でした。今後とも応募されて中学生の手本になって下さることを願っています。

今後応募されるみなさんは、自分の体験したことや思ったことをそのまま三十一文字に詠めばいいと思いますが、加えて、わたくしたちの郷土を踏まえてじっくり味わいのあるうたを詠まれるよう切望します。

最後になりましたが、みなさんの益々の御健勝と今後のご発展をお祈りいたします。

編集後記

本年度、歴史探訪で訪れたのは、松阪市でした。表紙の写真は、松坂城跡前に現存する御城番屋敷の風景です。古事記編纂千三百年にあたる年に、古事記の研究者である本居宣長の故郷を訪ねることができ、宣長を尊敬する忠順翁がこの地を訪ねた気持ちが想像できるようでした。

四月に行われた総会では、忠順翁生誕二百年を、西山万歳保存会と堤小学校郷土芸能部のみなさんによる西山万歳や、木戸優粋師に木戸粋叡師作「郷土偉人詠村上忠順」他を吟詠詩舞でお祝いしていただきました。

「忠順大賞」では、選者の荒川先生をはじめ小・中学校の先生方に大変お世話になりました。

この会報を発行するにあたり、ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。

（事務局　酒井）